

魚類防疫に関する技術指導と研究

(魚病対策指導事業・水産用医薬品対策事業)

開内 洋・岡本 満・石原成嗣・松本洋典

1. 研究目的

海面及び内水面の魚病被害軽減と魚病のまん延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導及び、養魚指導・相談を行なう。

2. 研究方法

種苗生産場、中間育成場、養殖場を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導、助言を行うとともに、疾病発生時には迅速に現地調査や魚病検査を行った。また、天然水域で大量へい死が起こった場合も現地調査や魚病検査を行った。

魚病の検査方法は主に外観及び解剖による肉眼観察、検鏡観察と細菌分離を行なった。細菌が分離された場合は、治療・対策方法並びに水産用医薬品の適正使用について指導を行なった。

昨年に引き続きアワビ類のキセノハリオチス感染症 (OIE 指定疾病) のモニタリング調査を農林水産省のガイドラインに従い行った。また、ヒラメのクドア属粘液胞子虫症 (*Kudoa septempunctata*) も昨年に引き続き、養殖場等でモニタリング調査を水産庁の作成した防止対策に従い行った。

なお、アユの冷水病に関しては「アユ冷水病対策事業」に別途記述した。

3. 研究結果

今年度の魚病診断件数は、隠岐地区海面 8 件、出雲地区海面 4 件、石見地区 2 件、内水面 42 件 (うち KHV 症検査 9 件、アユのエドワジェラ・イクタルリ症検査 21 件) であった。主要なものとしては以下のとおりである。

出雲、石見地区では、中間育成中のヒラメ稚魚で昨年に続きシュードモナス・アンギリセプ

チカ症が発生した。

出雲地区では種苗生産中のアカアマダイに原因不明の大量斃死や滑走細菌症等が見られた。

石見地区では養殖のヒラメに滑走細菌症が発生した。また、食品への異物混入に対する相談もあった。

隠岐地区では種苗生産用ヒラメの親魚でイクチオボド、滑走細菌、ネオヘテロボツリウム症が発生し、マダイの親魚でハダムシ症、白点病が発生した。また、8月に畜養中のマアジがレンサ球菌症に感染した。

アワビ類のキセノハリオチス症に関して、県内種苗生産施設及び畜養場等のメガイアワビおよびクロアワビについて、930 個体 (222 検体) の PCR 検査を行ったが、全ての検体で原因菌は検出されなかった。

ヒラメのクドア症に関して、県内種苗生産施設及び養殖場のヒラメについて 8 尾 (8 検体) の PCR 検査と 30 尾の検鏡検査を行ったが、全ての検体で原因菌は検出されなかった。

内水面では、KHV 症疑いのコイの斃死発生件数が 4 件あり、そのうち個人池 2 件、天然河川 1 件で KHV 陽性が確認された。また、宍道湖水系の 5 月の定期検査でも KHV 陽性が確認された。アユのエドワジェラ・イクタルリ症は、6～8月において西部の天然河川の泥、付着物から培養した試料の PCR 検査で陽性を確認した。10月のアユからも 1 件の陽性を確認した。また、アユ、コイ、ヤマメ、フナなどで細菌性疾病等が見られた。

海面 (出雲地区、石見地区、隠岐地区) 及び内水面の疾病発生状況及び診断状況の詳細については添付資料に記述した。